HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評 藤田尚志、宮野真生子 編 『性 : 自分の身体ってなんだろう？』
Author(s)	見附, 陽介
Citation	応用倫理, 10, 26-29
Issue Date	2017-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.10.26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68205
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_03mitsuke.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書　評

藤田尚志、宮野真生子 編

『性――自分の身体ってなんだろう?』

（愛・性・家族の哲学②）　（2016 年、ナカニシヤ出版）

見附陽介（北海商科大学）

1. 本書の概要

本書は藤田尚志氏、宮野真生子氏によって編まれたシリーズ「愛・性・家族の哲学」のうちの第二巻にあたる。本書では、タイトルからわかるように、とくに性の問題をテーマに据えた諸論考が集められている。シリーズ名に哲学と銘打たれてはいるが、本書の内容は決して難解なものではない。今日に性を論じるにあたって必要な基礎的な概念を説明する第一章から、当事者の声を聴く第二章と入門的な議論から順を追って議論が深まっていくよう諸論考が並べられており、その構成の妙が本書を初学者にも近づきやすいものにしてくれている。二つのコラムと各章の最後に付されているブックガイドも、さらなる学びの深化を助けてくれるだろう。

宮岡真央子氏による第１章「固有の身体・多様な性を生きる――文化人類学の視点から――」では、「セックス」（生物学的性）・「ジェンダー」（文化的性差――男らしさ／女らしさ）・「セクシュアリティ」（性的指向――異性愛／同性愛）という基本的概念の相違について確認がなされたうえで、諸文化の成熟儀礼に見られる身体のジェンダー化の内実やそこに読み取れるセクシュアリティの規範が解説される。ただし本章の議論の関心は、それら伝統的な成熟儀礼によって形作られる、「ジェンダー、セクシュアリティを女性／男性の二元的な枠組みで捉える」性別二元論に収まらない多様な性のあり方へと向けられている。これは今日の性問題を主題とする本書全体の方向性として捉えてよい。

宮野真生子氏監修による第２章「身体・自己・性をめぐる池袋真との対話」では、性的少数者の当事者である池袋真氏と学生（および教員）たちの対話の模様が収録されており、単なる“概念”では捉えられないリアルな問題が論じられている。LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）などのテレビでの扱われ方、カミングアウトを受けたときの対応、HIV 感染（あるいはそれにまつわる偏見）の問題、身体の性とは異なる「心の性（性自認）」の多様性（あるいは確定不可能性）などが当事者の口から語られている。

佐藤岳詩氏による第３章「私たちの身体と性とエンハンスメント――美容整形をめぐって――」では、自己理解と身体の関係をめぐる問題が論じられる。その際主題となるのは、身体の人工的な「強化」としてのエンハンスメントの問題である。少なくとも機能上はとくに問題のない生まれつきの顔を手術で変える美容整形なども、治療ではなくエンハンスメントとされる。また美

容整形はそれぞれの性に期待される「らしさ」を表出する外見の獲得を目指すものである限りで、同時に性の問題でもある。エンハンスメントは、自己の理想的イメージ、つまり“なりたい自分”を即物的・技術的に実現する方法であるが、しかし、この自己イメージが社会的に「構築」されたものであったとしらどうだろう。そのときエンハンスメントは多様性を排除する社会における「バイアスをより強化する」ものとなるにちがいない。本章では、問題の本質はエンハンスメントという技術にあるのではなく、我々の社会における性の規範あるいは「性の二元論そのもの」にあることが論じられる。

筒井晴香氏による第４章「「脳の性差」と「自然」――「男脳」「女脳」って？――」では、脳科学の観点から性差の問題が論じられる。脳の性差に関する話は、いわば男らしさ／女らしさというジェンダーに関わる問題を生物学的な性差に還元する一つの本質主義的な言説である。本章では、様々な科学的な性差研究によりこの脳の性差とされるものが、論者によって判断が大きく分かれるものであり、生得的要因によるものか否かという問題はどちらかにはっきりと答えが決められるものではないことが示される。もちろん他方で、本章では環境決定論一辺倒になることへも懸念が表明されており、結論としては、様々な要素の絡み合いの中で多様性が生まれることの重要性が主張される。

相澤伸依氏による第５章「ピルと私たち――女性の身体と避妊の倫理――」では、ピル使用の是非の問題を通じて女性の自己決定（とりわけ避妊をめぐる自己決定）の問題が論じられる。ピルの使用については、それが女性の「自然な自己」を失わせるものであることや、あるいは避妊の負担を女性のみに負わせるものであることから、それを否定する言説がある。しかし相澤氏はこれらの言説に対して、ピルによって「女性自身が避妊そして身体をコントロールできること」をむしろ重視し、「女性自身が選択することの意義」を高く評価する。

古賀徹氏による第６章「恋愛するとどうしてこんなに苦しいのか――性的自己決定の限界――」では、自己決定における自己というものが精神分析学の知見に基づいて改めて検討される。本章では、とりわけ自己決定が性的であるとき、その自己はもはや自分ではなく「別の何かに乗っ取られている」と主張される。性的欲求に関するフロイトの理解に基づくならば、他者への恋愛感情は幼児期の自他未分化の状況を再現しようとすることから生まれるものであり、その相手は全能感をもたらす「母親もしくは父親の身代わり」である。もしそうだとすれば、恋人を選んだ自己の決定は、「まったく自己による決定ではない」ことになる。恋人が親の代理である限りで、恋人の選択は親の存在によって決められており、またそれが自らの投射したリビドーを自ら回収するナルシシズムの構造を取る限りで、その決定は「リビドー資本」によってなされており、自己はリビドー資本の増殖を担うエージェントでしかない。本章ではこのような自己の基本的理解のもとに、恋愛および結婚、さらには資本主義社会における欲望とコミュニケーションの問題が分析されていく。

2. 哲学的研究としての本書に対する論評

以上、簡単に内容の概要を述べてきたが、以下では本書の全体的構成に対する論評も加えたい。冒頭に述べたように、本書は性をめぐる今日の諸問題を学ぶための入門書としてよくできている。

しかし同時に、本書を読むとある種の消化不良感を覚えるのも確かである。原因はいくつか考えられるが、紙幅の制限もあるのでここでは一点に絞って論じたい。

本書において消化不良感を覚える最大の原因は、議論の縦割りの問題である。冒頭でも述べたが、本書は「愛・性・家族の哲学」というそのシリーズ名が示す通り、哲学的研究を謳っている。本書の「シリーズ刊行にあたって」で編者が述べるところでは、哲学的研究とは「社会学的・法学的・人類学的知見に依拠しながらも、それらを自由に横断し、縦横に媒介することで、それらの観点自体がもたらす制限に自覚的・批判的なまなざしを向ける」ものである。残念ながら編者の思惑とは違って、本書でこの哲学の方法が果たされているとは言い難い。各論考の間で相互言及はあるが、形式的なものであって、それらの相互作用から新しい議論・視点が出てくるという類のものではない。したがって、これらの議論の間を横断し哲学的に考察する作業は読者に預けられていると言えよう。本書評でもその作業の一端を試みてみたい。

本書の諸論考のうちに共通して見出される主題は、性的自己決定の自由である。ジェンダーやセクシュアリティといったものが社会的に構築されたものであるならば、そのことは同時に、その規定を自由に乗り越える社会的・文化的あるいは技術的方法が存在する可能性をも示唆している。しかしながら、例えば第6章の議論によれば、この自己決定における自己（正確に言えば、自己におけるリビドーの投射／回収のナルシシズム構造）は、自己の外部によって規定されている。これを同じく自己の社会的構築性に言及する第3章の議論と組み合わせるとどうなるだろうか。美容整形（エンハンスメント）に限らず、性同一性障害の“治療”に関しても、実践は一般に自己のセルフイメージに合わせて身体を変えるという方向を取る。しかし、もし自己が本質主義的な不変の実体ではなく、その性的指向も含めて社会的に構築されるものなのだとしたら、なぜ身体に合わせて自己イメージを変えるという方向が取られてはいけないのだろうか。「心の性」に合わせて身体を変えるのではなく、身体の性に合わせて心を変える方向はなぜ論じられないのだろうか（ここでは哲学的論議としてあえてこの議論を持ち出していることをご承知おき願いたい）。第5章において、ピルの服用は一種のエンハンスメントと理解されており、同時にピルによって自己のあり方に変容が現れることが述べられている。これはおそらく体内に摂取された物質が脳に（直接・間接に）影響を与えることで生じた心理的変容であり、したがって生物学的決定論の座と目された脳における人工的変容である。仮にある種の薬剤の投与によって、脳を通じて「心の性」が変容され変更され得るとすれば、心の性に合わせて身体を作り変える実践と身体の性に合わせて心を作り変える実践は、ともに心身の不一致から生じる苦悩を取り除く実践として等価の地位を得る。もし後者の実践が悪夢に思えるのだとしたら、そこには心を本質とし身体を非本質とする西洋形而上学の思考がくり返されている。社会の性枠組みが作られたものだとしたら、それに対する同じ分析の視点が、自己の心の性枠組みもまた作られたものであることを明らかにするはずである。にもかかわらず、それに目をつぶって性的“自己”決定を尊重するために社会において多様性を大事にしようとただ主張するのであれば、それは編者が述べる「反時代的な」哲学的考察の結論ではなく、ありきたりな今日的スローガンの単なる反復となるだろう。ここで指摘しているのは、多様性をめぐる規範の妥当性如何ではなく、本書においてそれが導出される論証過程の凡庸さの問題である。評者自身も、薬によって心を作り変える実践は悪夢だと思う。しかし哲学的考察の意義は常識を超える地平にまで思考を運ぶところにあり、そこから常

識的な（あるいは少なくとも普遍的に受け入れ可能な）判断にまで舞い戻る論証過程にこそ哲学のスリリングな営みがある。本書における諸論考を編者が述べるように横断的に交差させるとき、そこには常識を超える哲学的な考察の可能性が見えてくる。しかしながら、繰り返すと、本書においてそのような考察が展開されることはないし、そのような展開の可能性に言及がなされることもない。それは、読者が自ら行わなければならない。そのための材料は、本書のうちにある。